

中村武羅夫

田山花袋氏



田山花袋氏



文壇に田山花袋氏の名を聞くのも既に久しいものだ。ずっと古い硯友社時代から、その美文や、紀行文や、小説には些い些い接して居る。然し、文壇に名を現わしてから久しい割合いに、その名の挙らないのも、久しいものであった。初め「野の花」だの「故郷」時代には弱々しいセンチメンタルな作品を描いて、それから、「うき秋」を書かれた当時からその作風が一変して「重右衛門の最後」「春湖」時代を経て、此の今の自然派の運動が盛んになるまで、短いものではあるが、随分書れたもの

だ。けれ共、實際花袋氏の眞の技倆——名が文壇に認められたのは漸く近頃のこと、藤村氏の「破戒」や濁歩氏の「獨歩集」に依つて覚醒せられた文壇に、自然派の運動が勃興して來た三十九年の春頃からのことである。

兎に角、現代日本の文壇で、自然主義を標榜して居る作家の中では錚々たるものだ。

自分が田山花袋氏に、その代々木のお宅で初めてお目に懸つたのは、忘れもしない四月の二十二日……空の曇つた雨模様の夕暮れ、六時過ぎて、室の中には最う燈火が点いていた。

自分はそれまでに三度ばかり同氏を訪ねたが、三度とも留守であつた。で、之れは文壇の大家とかには能く有り勝ちな、我々のような者に会うのは面倒なので、それで居留守を使われるのではあるまいか、と然う思つて、無礼だと憤慨もし、その仕打ちを忌々しくも思つたが、会つて見て、今迄の然うした厭やな感情はケロリと忘れて了つた。

その夕、玄関に音訪うと取次には奥様が出られた。顔の丸味な、色の白い、些つと愛嬌のある顔だ。自分の来意を聞いて、来客中ですが、と些つとためらわれたが、

花袋氏に聞きに行かれた。旋て出て来られて、玄関の右側の八畳の客間に通された、成程其所には先客があつて、酒が始まつて居る。客は極く親しい人と見えて、花袋氏は無雑作な風をして居られる。自分を上の方に坐らせて、「好くお出で下すつた。此の間は生憎何うも失礼ばかりして……………」

挨拶をして直ぐ膝を組んで、度の強い近眼鏡の底から、鋭い眼を光らして、睨むように自分を見られる。その眼が余りに光るので、自分は初め恐ろしいような気がした。之れ迄作物を読んで想像して居た花袋氏と、此の實際



の花袋氏の人物とは非常に違つた。作物に依つて自分の想像に描いた花袋氏は、痩せた、蒼い顔の、女々しい人だと思つて居た、ところが、實際の花袋氏は、それと全く反対で、能く肥え、胸廓の広い、頸の短かく太い、目は方ほ少なくも二十貫目以上と云う立派な体格だ。胸や手の指に濃い毛が生えて、齒は少し外に反つた。身形は一向構わぬらしく、その態度も極端に云うと粗野の方で、跌坐を組んでグビグビ酒を吞まれる。そして、話には余り調子付かれない方で、不凶すると言葉に熱を持つが、直ぐ黙つて、例の鋭い目で、ジロリと見られる。相手の

心の底まで睨まねば承知出来ぬと云った風だ。旋て酒が済んで飯を食い、茶を飲んで巻煙草を幾本でもふかふかと吹かされる。自分は、此の体格で、此の様子で、能ああした恋や少女に憧れたセンチメンタルな作品が出来るものだとそれを第一不思議に思った。

声は少し錆のある太い声で、余り人の胸に響く方では無い。人と相對して居ながら、言葉の断れ間には、何か自分のことを考えて居ると云ったような、取りように依っては厭やなところがある。座談は極く下手の方だ。客の方から話を仕向けねば、何時までも深い沈黙は続く。

その間、花袋氏は鋭いその視線を空に投げて、ふかふか煙草を吹して居られる。客があるのか無いのか、そんなことには頓着無く、自分一人だと云った風だ。話を仕向けると一通り答えはされる。答えて了うと元の沈黙になるのだ。で自分は手持無沙汰で、何か話頭を向けようとする。之れでは、客の方で主人役を務めるようなものだと思った。

総ての様子にゆったりとした逼らない所があつて、些つとは懐き難いが、然し気の置き無い人だ。自分は色々話を仕向けて、此の人の心の底まで読もうとした。けれ

共、恰度年取つた老探偵のように、心に一分の隙も無く、胸の底まで入り難い……いや、入り難いのは無い入れ無い人だ。上べは成程気さくなところがあつて、或る所までは接し易い。然し、その或るところより以上深く此の人には接することは出来無い。そこまでは何の隔ても無く人を近寄せるが、それ以上には何うしても入るを許さない。自分の胸の底に人を触れさせるのは何か自分のプライドを傷付け、自分の屈辱でもあるようにピッタリ蓋をしてらう。そのように自分の胸には蓋をして置いて、それで相手の胸の底まで探らうとして油断をし無い、悪

るくずるいい人だ。ずるいと云つてもそれが此の人のキャラクターだから仕方ない。

芸術家だ。胸の底には熱い血も燃えて居よう。然し、一時パツと燃え上るその情の火も、忽ち養われた冷たい理智の為に直ぐ消されて了う。胸には熱い血汐をたぎらせながら、理智に囚われた此の人の頭には、その血汐のみなぎり——情の赴くままに身を任せることが出来無い。寧ろ、その情を抑えても、コンベンショナルの完全な人になろうと努力する。花袋氏の心には常に二つの潮流がある。一つはその生れながらのデリケートな性。一

つは従来のコンベンションに養われた、全く囚われた性、此の二つの性が各々調和されず、前者は芸術の上に、後者は日常生活の上に、二面に現われて居る。それで作品の上では極めて感情的な、触るれば其胸から火が燃えそうな人のように思われるが、實際人物に接して見ると、常識の発達した理智の明るい、普通円満な人である。

自分は初めて花袋氏に接して、此の両面の生活をして居る人であると言ふことを最も深く感じた。幾らこちらから胸を展いて、胸と胸と相触れさせようと勉ても、花袋氏の胸には、養われたる性と云う一枚の冷たい板があ

って、どうしても切実にその胸に相触れることは出来無い。その胸に抱かれることは出来ない。その作物に依ってその人物を想像し、大なる期待を以って面会した自分は、初対面に於て、容易に人を触れしめ無いその胸に、何となく慊らなく失望した。

自分は花袋氏を心にはどんな悩み、どんな悶えがあっても、それを能く抑えて、平凡な日常生活に甘んじて居ることの出来る、極めて常識の発達した人で、唯作品の上 に於て、その生れながらの飾らない自然の生活をして居られる人だと思った。





日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館